

## 2. 学科

### 2.1. 人間発達科学科

#### 1. 運営

新学科発足の1年目で、学科の運営体制が新学科中心となり、特に人間発達科学科としての運営会議を持つことはなかった。

#### 2. 教育

平成17年6月にゼミ分けを行った。学科の運営面でのことはともかく、教員の教育負担は新学科より旧学科に中心があることはいうを待たない。現在の2年次生が卒業するまでに、過年度生も含めて滞りなく卒業させることが求められている。

#### 3. 今後の課題

多くの教員の意識と仕事量が新学科中心になっていることを痛感するが、次年度さらに次の年度は旧学科の学生が最も専門性を鍛えなければならない時期である。そのことを教員一人ひとりが自覚し、日常の業務に励む必要がある。

(人間発達科学科長 船寄俊雄)

### 2.2. 人間環境科学科・人間環境学科

#### 1. 運営

学科に関する意思決定はすべて学科・専攻運営会議で行われる。運営会議は、学科長と各講座主任の計5人で構成され、全員出席のもとで開催される。今年度は18回開催し、人事、予算、研究、教育、入試等に関わる重要案件を審議・決定した。

学科委員会として、「概論・総論実施委員会」、「学科電子情報専門委員会」、「カリキュラム検討委員会」、「学科将来検討委員会」及び「大学院再編検討委員会」を設置している。「カリキュラム検討委員会」は、今年度新体制の下で1年次生を迎え、専門教育が始まる来年度以降が実質的な活動である。「学科将来検討委員会」は、学科理念に則した教育・研究の更なるあり方を検討し、学内外に学科の存在感を大にすべく設置された。しかしながら、全学の大学院研究科への部局化構想が急浮上し、その構想が学科の将来に大きく影響することから、当委員会活動は休止することにした。「概論・総論実施委員会」、「学科電子情報専門委員会」及び「大学院再編検討委員会」の活動報告は後述する。

#### 2. 人事

教授ポスト枠に関して、学科への再配分を確認した。大学院再編構想に沿って、専門分野「環境地質学」と「数理統計学」の2件の採用人事を審議し了承した。

#### 3. 予算

学部から学科共通経費として約300,000円が計上された。半額は、学科共通科目の授業充実のために、図書費として執行された。残り半額は、「学科将来検討委員会」の活動経費として計上したが、活動休止のためにやむなくコース共通経費に振り替えた。

#### 4. 入試

(1) 社会人特別選抜(定員5人)は4名の志願者があり、2名の合格者を決定した。

(2) 平成18年度前期日程・後期日程選抜において、前期日程文科系受験コースは、3.1倍、理科系受験コースは、2.9倍、後期日程小論文受験コースは、7.0倍、理科系数学受験コースは、12.9

倍であった。後期日程理科系数学受験コースは、昨年度（4.95倍）より大幅な増加で今後の受験者の動向を分析する必要がある。前期日程について、平成15年度からの倍率の推移は以下のとおである。

	H15	H16	H17	H18
文科系受験コース	3.8	3.5	3.6	3.1
理科系受験コース	2.6	3.9	2.5	2.9

文科系、理科系受験コースともに隔年で受験者数が増減する傾向である。

- (3) 第3年次編入学特別選抜は、自然環境論コースと数理・情報環境論コースで実施された。今年度は、自然環境論コースに4名、数理・情報環境論コース志願者10名の志願者があり、各コース2名、計4名を合格とした。
- (4) 人間環境学科としての初めてのAO入試を実施した（定員8名）。20名の応募があり、第1次選考は、調査書、志望理由書（将来へ向けた夢と希望及び大学で学びたいこと）、記述書（これまでに理科の課題研究として取り組んだこと）に基づく書類審査により行い12名が合格した。第2次選考は、第1次選考合格者に対して、ポスターセッションによる「理科の科目に関する総合的な能力の検査」と筆記を含む面接により行い、6名が合格した。第2次選考で合格したもののうち、大学入試センター試験が基準点（420点）を満した4名が最終合格者となった。

## 5. 教育

- (1) 新学科体制になり、最初の105名の新1年次生を迎え、4月6日にガイダンスを行った。新学科の全般的な説明後、各コースからコースの特色、カリキュラムや1年後のコース受入れの基準等の説明をした。学籍番号により学生を4グループに分け、各コースから選出された担任教員4人により、履修相談やコース進路相談等の指導体制をとった。
- 2年次生に対してコース配属のためのガイダンスを4月5日に行った。今年度もコースの希望者数がコースの受入れ数の範囲内におさまり、自然環境論コース23名、生活環境論コース29名、社会環境論コース29名、数理・情報環境論コース10名を決定した。ここ数年、1年次生ガイダンスでコース受入れの制限等を詳しく説明していることから、支障なくコース配属決定が行われている。
- (2) 新学科のコアとして、学科共通科目「人間環境科学概論（1年次前期）」「人間環境科学総論（3年次後期）」が設定された。「人間環境科学概論」を踏まえて、今後「人間環境科学総論」の内容を再検討する必要がある。

### 【概論・総論実施委員会報告】

#### 「人間環境学概論」

この科目は、今年度より1年次生向けに実施した学科共通科目であるが、講義内容や運営方法については、平成13年度より開講してきた「人間環境科学概論」のうち「」を基本的に踏襲している。そのため、新たに始めた科目でありながら、担当者間に特に混乱もなく概ね順調に進行したと理解している。来年度以降についても、プロジェクター等の機器の活用を考慮に入れて、さらに発展させていくつもりである。来年度も、以下の内容で臨む予定である。

- 
- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 1) はじめに：現代日本の環境問題 | 2) 現代国際社会の環境問題 |
| 3) 酸性雨について        | 4) 気候変動の諸問題    |

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 5) オゾン層の破壊と紫外線環境 | 6) 森林の破壊と種の保存   |
| 7) 都市と環境問題       | 8) 住宅と環境問題      |
| 9) 衣と環境問題        | 10) 植物と環境問題     |
| 11) リスク評価と統計学    | 12) 現代日本の環境法・政策 |
| 13) 環境保護に向けた取り組み |                 |

-----

「人間環境学総論」

この科目は、平成 19 年度より 3 年次生向けに開講する学科共通科目である。本委員会は、すでにこの科目についても平成 16 年度の段階で議論をすませ、その内容については学科に対して報告している（『人間環境学概論』及び『人間環境学総論』に関する報告書」2004 年 7 月 5 日）。今年度においては特に検討を行ってこなかったが、平成 19 年度からの実施に向け講義内容及び運営方法につき、さらに詳細に詰める必要があることを認識している。平成 18 年度の早い段階で、再度検討会を招集し、講義を進めるに当たったの最終的なチェックを行う予定である。

- (3) 今年度もインターンシップに積極的に取り組み、学科・コースの教育・理念に沿って幅広く受入れ先を開拓した。今年度の実習先は以下のとおりで、20 名が履修した。

ひょうご環境創造協会，兵庫県立生活科学研究所，神戸市立青少年科学館  
 神戸市立須磨水族園，大阪府環境農林水産部，(財)サントリー生物有機科学研究所  
 (株)里と水辺研究所，(株)日本ミクニヤ，応用技術株式会社，(株)神戸マツダ  
 神戸新聞社，フジッコ株式会社，有限会社ハートビートプラン  
 神戸市立六甲アイランド高等学校

## 5. 研究

### (1) プロジェクト研究

共同型協力研究経費

研究題目：紫外線遮蔽素材開発

教育研究活性化支援経費

研究題目：人間環境学科 AO 入試に接続した新しい教育システムに関する先導的試行

発達科学研究推進経費

研究題目：学生の進路に見る発達科学部の文理融合の分析

研究題目：新規の二酸化炭素 CO2 削減技術の開発 -CO2 固定・削減の飛躍的促進技術の開発-

科学研究費補助金

研究題目：大学における数理情報教育に求められている課題の分析とその改善に関する研究（基盤研究(B)，平成 16～18 年度）

研究題目：地中レーダ・分析電頭を用いた十勝沖，兵庫県南部地震で損傷斜面の降雨による崩壊予測（基盤研究(B)，平成 16～18 年度）

研究題目：都市中間層における住宅条件の構造再編（基盤研究(B)，平成 16～18 年度）

研究題目：集団ケアから個人の尊厳にもとづくユニットケアへの移行研修プログラムの開発と評価（基盤研究(B)，平成 17～19 年度）

### (2) 公開講座

大学連携「ひょうご講座」(発達科学部, 兵庫県主催)

題目: 「情報」の視点からの環境科学へのアプローチ

開催期間: 5月17日～7月12日(毎週火曜日)

受講対象者: 一般市民

趣旨・目的: これまでに自然科学的手法を用いた環境問題克服へのさまざまなアプローチがなされてきたが, その成果はどうであろうか。この講義では, これらのアプローチを振り返りつつ, 自然界からの環境に関わる情報をどのように的確に収集し, またどのように環境対策に生かすかという点を中心に置いた。テーマは以下のとおりである。

1. はじめに, 2. 自然環境情報とその解釈の困難さ(気候変動や水質を例として), 3. 地球圏の放射線と生体, 4. 衛星からの環境情報, 5. 生態系の化学情報, 6. 遺伝子変異と環境, 7. バイオインフォマティクスと環境科学, 8. 大気汚染を「観る」, 9. 植生と環境

### (3) 講演会

「自然環境論セミナー」が今年度25回開催された。それらの内容は, ホームページ [ <http://newweb.h.kobe-u.ac.jp/seminar/seminar.html> ] 上で公開されている。その中で, 学科構成員からの話題提供は以下の2題である。

第138回題目: 「Science 125 Questions セミナー」

第137回題目: 科学・技術的課題に対する市民のエンパワーメント・システムの構築  
その他3件の講演会を3月に実施した。

題目: スポーツ科学データの分析における数式処理システムの有効性

講演者: 宮地 力(国立スポーツ科学研究所)

題目: 数式認識における数式処理システムの有効性

講演者: 中川 康二(九州大学 COE 博士研究員)

題目: 高専の数学教育における数式処理システムの効果的な利用について

講演者: 西澤 仁(豊田高専)

### (4) シンポジウム

理系 AO 入試の初年度実施を踏まえて, 以下の内容でシンポジウム(学部主催, 学科後援)を開催した。

テーマ: 理系 AO 入試を通じた高校と大学の接続・21世紀における科学者養成の新展開を目指して

日時: 平成18年3月21日 13:00～17:30

場所: 発達科学部大会議室

趣旨: 21世紀における科学者養成教育を展望するとともに, AO入試を通じた高校と大学の接続について, 特に, 高校・大学と一貫した科学教育の新展開についての講演を中心に, 今後の日本の科学教育にとって有意義な意見交換の場とする。以下の2つの基調講演と高校と大学のそれぞれの立場からの問題提起に引き続いて参加者の間で討論を行う。

題目: これからの科学者養成に期待すること

講演者: 小田垣孝(九州大学大学院理学研究院)

題目：これからの科学教育と科学者養成プログラムへの期待

講演者：鳩貝太郎（国立教育政策研究所）

## 6．広報

### (1) 高校生説明会

8月2日（火）、8月9日（火）午後1時～午後5時の2回、平成17年度高校生への説明会を開催した。人間環境学科の参加者は、1回目は120名、2回目は142名であった。学科の特色、卒業進路状況、就職先等の説明を行い、質疑応答後、高校生の希望に応じて、それぞれの会場に分かれてコースの説明会を実施した。

### (2) 新学科電子情報委員会報告

学科内で開催されるセミナー等のイベントについて、随時ウェブページへの掲載を行った。また、教員の異動、平成16年度の就職実績追記等の情報更新を行った。

年次進行中の新カリキュラムでの科目一覧表をパンフレットと同じ形式でウェブページに掲載した。

電子メールによる問合せに対して、5件回答した。なお、スパムメールへの対応のため、問合せアドレスの表現方法を画像に変更している。

昨年度の学科ウェブページ作成時に不足していた学生募集・入学試験に関する情報ページを作成した。

ウェブページへ掲載の外部資金獲得情報等の情報更新のための資料収集や前期課程のウェブページの一斉の検討も行ったが、実際の情報更新やサイト一新については実施に至っていない。

## 7．大学院再編 [大学院再編検討委員会報告]

研究科の平成19年度部局化構想に合わせ、学部の上に「人間発達環境学研究科」の設置が検討されている。このことにより、本学科では、現在自然科学研究科後期課程を担当する教員の帰属を前提に「人間環境学専攻（前期課程・後期課程）」を構想した。

本専攻は、自然科学、社会科学、数理情報科学等の諸手法を駆使し、諸環境の変容を基礎的視点から総合的に認識しながら人間の発達を促す新たな環境の形成を目指すところに共通の目的を置いている。

カリキュラムの作成に当たっては、こうした目的に則し、高度な専門知識を備えつつ具体的な問題状況に対し柔軟に対応しうる人材の育成を配慮した。また、前期課程と後期課程の5年一貫教育を鮮明にしたカリキュラムの構築を検討している。

（人間環境科学科・人間環境学科長 白倉暉弘）

## 2.3. 人間行動・表現学科

### 1．運営

学科の改組に伴い、学科運営体制の主体は新学科となり、今年度は人間行動・表現学科としての諸会議は開催されなかった。音楽表現論及び造形表現論に関わる諸課題は斉田大学院専攻長が、身体行動論に関わる諸課題は平川学科長が対応するという形で学科運営がなされた。学科全体に関する行事としては、4月の新2年次生ガイダンスの開催のみであった。

### 2．予算

予算配分は新学科に対して措置されたため、人間行動・表現学科としては予算を持たない。そ

れゆえ、今年度は、学科共通としての予算措置はしなかった。

### 3. 入試

#### (1) 第3年次編入学試験

##### 音楽表現論講座

##### 1) 志願者数及び合格者数

本年度の志願者数は8名、うち受験者数は同数の8名であり、合格者数は2名であった。昨年、一昨年の志願者数もほぼ同数の9名であり、この3年間で目立った増減は見られない。

##### 2) 志望者の特徴

出身大学・学部・学科は、教育大学、医科大学・看護学科、音楽学部、理系学部、文系学部、教育学部、短期大学・家政学科等多様であった。出願の動機は、音楽の勉強を続けたい者、進路を変更して音楽を学びたい者、進路は基本的に変更しないが音楽を学び、それを将来何らかの形で活用したい者などであった。

##### 造形表現論講座

##### 1) 志願者数及び合格者数

本年度の志願者は、4名（前年比2名減）で、全員受験した。内訳は女子が3名、男子が1名で、試験の結果1名を合格とした。

##### 2) 志願者の特徴

女子志願者はすべて女子短大の英語関連学科の在籍生で、男子志願者は、国立大の工学部の在籍生であった。また、志望の動機は、ファッションの文化的研究、表象文化の心理学的研究、美術やデザインの理論的・実践的研究などである。ここ数年、志願者の多くがアートやデザイン系以外の大学の受験生であり、多様な領域の人に門戸を開放するという当コースのねらいは達成されていると言える。また、ファッション文化の専任教員を採用したことによって、この領域の研究を志す志願者が増加していることも特筆すべきである。

##### 身体行動論講座

##### 1) 志願者数及び合格者数

本年度の志願者数は8名、うち受験者数は同数の8名であったが、合格者数は0名であった。志願者数は、昨年度と比較すると3名の増加で、一昨年度より1名の減少となる。

##### 2) 志願者の特徴

志願者8名の出身大学・学部・学科は例年同様に多様であったが、志願者全員が保健体育教員免許状の取得を希望していたことは特筆すべきことである。編入学試験を導入した当初から志願者の中には教員免許状の取得希望者がいたが、ここ数年で急速に増加し志願者の大半が希望するようになり、本年度の受験者では遂に全員が取得希望者であった。

### 4. 教育

#### (1) 学科共通科目未履修者への対応

学科共通科目未履修者に対する再履修のためのカリキュラム対応を行った。新学科へ移行したこともあり、早急に単位修得を確実なものにさせる必要がある。

## 5. その他

研究、広報、その他に関して特記する事項はない。

(人間行動・表現学科長 平川和文)

## 2.4. 人間形成学科

### 1. 運営

新学科発足の1年目として、昨年度より執行されている学科を中心とした運営体制の実質化を図るべく運営を行った。新しい授業科目、特に、今年度は新設の1年次生向け学科共通授業科目の内容の充実が急務であり、多くの学科構成員がそのために努力を行った。

年度途中より大学院の大幅な改組が進行し、多くの学科構成員が様々な仕事を同時にこなさなければならない状況が存在し、時間的にも精神的にも十分な運営ができなかったというのが正直なところである。

第2水曜日が学科運営会議の定例開催日となっているが、上に述べたような事情から実行できなかった。急を要する人事が数件あり、持ち回りの運営会議を含めて全体として12回程度の会議を持った。

新学科の発足に伴い、会議の定例化を図り名実ともに学科の意思決定機関としての機能を持たせることが課題である。

### 2. 人事

昇任(教授)人事1件と採用人事4件を人事委員会に提案し、教授会で承認された。年度途中より急浮上した大学院改組との関係で、学科の将来を見据えた人事構想を練る時間がなかった。しばらく採用人事がない見込みなので、少し時間をかけて人事構想を練る体制づくりが必要だと考える。

### 3. 入試

一般選抜については例年どおり行われ、特に大きな問題はなかった。

社会人選抜試験についても従前どおり行われ、特に大きな問題はなかった。ただし、選抜に当たり、合格者の水準確保のための学科(人間発達科学科)の申合せに留意して行った。

第3年次編入試験についても例年どおり行われ、特に大きな問題はなかった。優秀な学生を確保できていると実感している。

なお、学科構成員の数が旧学科に比べて減少したため、社会人選抜と第3年次編入試験の二つの仕事を同日に実施する上での工夫が必要であることを感じた。

また、オープンキャンパスについては、今年度も昨年度に引き続きコースごとに丁寧に高校生たちに対応したことは良かったと考えている。コースによっては、在生が出席したところもあり、次年度以降も積極的に踏襲したいと考えている。

### 4. 教育

新年度当初にオリエンテーションを行った。ほとんどすべての教員が出席し、盛り上がった。教員も大変忙しくなっているが、年に何回かの大事なイベントには積極的に参加していく必要を強く感じた。

従前行っていた後期開始当初の2回目のオリエンテーションを今年度は省略したが、そのことが後述するコース分けに微妙に影響を与えたように思われるので、次年度は復活する必要があると感じている。

オリエンテーション時に、例年同様教員免許取得希望調査を行ったが、60%を超える学生が希望しており、これは近年の傾向である。

また、例年と同様簡単なアンケート調査を行った。結果については、学生たちに開示（掲示板に掲出）すると同時に、学科のすべての教員に文書で配布した。新学科においてもこのアンケート調査は継続したいが、その調査内容の見直しと同時にもう少ししっかりとした分析とまとめを作る必要を感じている。

コース分けについては平成 18 年 2 月 16 日に行い、下記のように全員所定のコースに配属が決定した（カッコ内は受入れ上限人数）。

心理発達論コース 30 名（30 名）

子ども発達論コース 20 名（20 名）

教育科学論コース 16 名（20 名）

学校教育論コース 28 名（30 名）

第 1 回希望調査で心理発達論コースが 41 名、子ども発達論コースが 21 名と受入れ上限人数を超え、前者は選抜を行い、後者は協議の上それぞれ上記の人数に落ち着いた。

コース分けに当たり大きな混乱はなく、学科共通授業科目による教育効果が現れ、心理発達論コースへの過度の集中化が避けられたものと判断している。

ただし、今回のコース分けの総括（特に学生たちの声を聞く必要を感じている）、次年度以降の振り分け方法、発達支援論コースの振り分けとの調整等が課題として残されている。

## 5．研究

個々の構成員の研究内容についてはまったく把握していない。学科全体としては、現在講座ごとに発行されている研究誌を、新学科においては学科で発行していく必要があるものと考えている。

また、今後、学科全体で取り組まなければならない研究課題を明確にするとともに、その推進に当たっての体制づくりを積極的に行う必要を感じている。例えば、人間形成に係わる諸問題について、学科構成員が幅広く参加し、外部資金を導入して遂行する研究を具体化したいと考えている。

## 6．広報

コース分けに当たっての最低限の情報を学生に提供する必要から、『人間形成学科教員紹介』を作成した。

## 7．今後の課題

次の 1 年間に解決を要する課題を列举しておく。

### (1) コース分けの方法について

第一希望が各コースの上限人数を上回った場合の選考方法。現行では心理発達論コースが 1 年次生に対し履修指定科目を設定しているが、学科単位の運営から見てそれが果たして妥当であるか否かや、他のコースも設定すべきであるかを検討する必要がある。

### (2) ゼミ分けの方法について

新学科体制においては、3 年次生の 4 月当初から学生をゼミに配属することになっているが、その配属方法を検討する必要がある。その際、発達支援論コースへの所属方法との調整が残されている。

### (3) 教育体制の充実のために



年度末に配分された追加予算で、ポスターセッション用のボードと心理統計法用の教材を購入したが、それら予算措置を待たずに学科に配分された予算で学科全体の教育体制の充実のためにどのような方策を取る必要があるかを年度当初に討議する必要がある。

(人間形成学科長 船寄俊雄)

## 2.5. 人間行動学科

### 1. 運営

人間行動学科は、学科の改組により平成 17 年 4 月に発足した新しい学科である。構成員は 18 名(教授 9 名, 助教授 8 名, 講師 1)で、旧学科体制の身体行動論(9 名), 健康発達論(4 名), 成人学習論(2 名), 児童発達論(1 名)及び人間科学研究センター(2 名)から構成されている。健康発達論, 行動発達論及び身体行動論の 3 つの履修コースから成る。学科定員は 1 学年 50 名である。学科の趣旨は以下のごとくである。

今日の社会を発展させた人間の行動は、一方では多くの問題も生み出してきました。それゆえ、今、人間行動が問われています。これからは新しい時代に適応するための行動と、人間を取り巻く自然的・社会的・文化的な環境へ主体的に働きかける行動が求められます。人間行動学科は、これらの行動と人間の発達に関わる教育・研究を通して、人間と社会が抱えている多様な課題に取り組み、豊かな生活と健全な社会の構築を目指す新しい学科です。

学科の運営は、学科運営会議及び学科会議により行われる。学科運営会議は学科長と 3 履修コース代表の計 4 名で構成されている。学科会議は 18 名の学科構成員全員で構成されている。基本的には、学科長が学科運営会議を招集し、学科運営に関する諸問題を審議し、学科会議での報告・審議事項原案を作成する。そして、学科会議にて運営会議での事項を審議し、学科としての意思決定をする。その過程で専門的に審議する委員会を構成することもある。本年度は、AO 入試検討委員会、新入生ガイダンス委員会、学科教務委員会、倫理規定検討委員会、学科シンポジウム検討・実施委員会等が構成された。

### 2. 予算

人間行動学科は、旧学科の 4 講座 1 センターからの 18 名の教員により新たに設置された。それゆえに、各教員は旧学科の所属講座に 2 年次生以上の指導学生を有している。そのため、予算は教授会決定に従って各教員に配分し、以後の処理は各履修コースに任せることとした。そのため、新学科としての学科共通予算措置は行わなかった。

### 3. 入試

新学科の発足と同時に、第 1 回目の AO 入試による新入生 12 名(応募者数 82 名)が入学した。一般入試入学生 41 名と合わせて計 53 名が人間行動学科第 1 期生として入学したことになる。

次年度の AO 入試について検討した結果、次年度からは新たに健康発達論あるいは行動発達論に興味・関心のある受験生を主とした「小論文受験」AO 入試を導入することとした。この新たな AO 入試方法の導入に伴い、昨年度実施した身体行動論への興味・関心のある受験生を主とした AO 入試方法は「身体運動受験」AO 入試と改名した。新たな入試方法は、書類選考、小論文、面接・口述試験、大学入試センター試験の結果を総合的に判断し、合否を判定する。定員は 8 名で、

昨年度までの後期日程の定員 10 名の内 8 名を振り分けることにし、残る 2 名は前期日程に振り分けることとした。これにより、来年度から 20 名を AO 入試により合格させることになる。この決定は 10 月の教授会で承認され、次年度（平成 19 年度）AO 入試から実施される。

#### 4. 教育

##### (1) 新入生研修会

新入生研修会を、5月14日（土）六甲山YMCAで実施した。目的は、新入生に対する履修指導及び学生と教員との親睦を深めことである。研修会の前半では、履修指導とコース分けの説明に続き、社会福祉主事任用資格と社会調査士資格の紹介を行った。その後、グループ分けを行い、教員と新入生が協力しながら昼食のバーベキューを楽しんだ。昼食後は、身体を動かすグループワークゲームや軽い運動を行い、さらに新入生と教員、新入生同士の親睦を深めた。当日午前9時に発達科学部前に集合し、貸し切りバスで研修実施場所へ移動、研修後に再び発達科学部前に戻り午後6時に解散という1日をかけての研修であったが、学科全教員18名と新入生51名の計69名が参加し、怪我や事故などもなく、新学科のスタートに相応しい充実した研修会であった。

##### (2) オフィス・アワー

学科教員をもっと知ってもらうこと、履修コース振り分けの資料として、後期始めに学科教員全員のプロフィール、研究内容、担当授業等を紹介したパンフレットを作成し、新入生全員に配布した。そして、11月の1ヵ月間をオフィス・アワーの月とし、新入生が自由に学科教員と話し合える機会を設定した。結果的には、学生は思ったより教員を訪ねていなかったようだ。

##### (3) 履修コース分け

1年次生は、2年次から3つの履修コースに振り分けられる。各コースの最大定員は、健康発達及び行動発達が15名、身体行動が25名である。振り分けは1月から行われ、まず1月中に希望コース調査と学生による調整を行った。次に、最大定員をオーバーしているコースに対して成績及び抽選により履修コース振り分けを行う。そして、3月23日に最終履修コース振り分けを発表する。そして、次年度4月5日に各履修コース毎にガイダンスを行い、2年次がスタートすることになる。

##### (4) 新入生意識調査

入学時と1月に新入生の希望履修コース、将来の進路、学部で学びたいこと等の意識調査を実施した。

#### 5. 研究

##### (1) 学科としてのプロジェクト研究

今年度発足したばかりの新学科なので、まだ具体的な学科プロジェクト的研究はスタートしていない。しかし、そのキックオフとして、第14回発達科学シンポジウムを学科主催で開催した。また、行動発達論が身体行動論とともに進める研究推進プロジェクトとして、「国際的ジェロントロジー・ネットワークの構築」を「神戸大学国際交流促進事業基金」による国際交流に係る助成に申請した。学科として「人間行動」学を創造する研究体制の構築とその推進は、持続的に取り組んでいかなければならない重要な課題であろう。

##### (2) 研究倫理規程の制定

人間行動学科における教育・研究は、人を対象とするものが多い。個人情報保護法の制定

もあり、個人のプライバシー、安全、健康問題、生命の尊厳等、個人情報の守秘は教育・研究上極めて重要な責務である。また、学科構成員が所属する学会においても、いわゆる「ヘルシンキ宣言」を受けて、学会独自の研究倫理規程を制定するところが増え、論文投稿に際しても確たる機関において審査を経て、研究機関内倫理委員会で承認された研究論文が採択の条件となってきた。

このような諸般の事情を鑑み、学科内に倫理検討委員会（委員長：柳田泰義）を設置し、学科独自に研究倫理規程を作成し、審査委員会を設置することにした。作成された規程は、教授会において発達科学部の規程（「神戸大学発達科学部における人を直接の対象とする研究に関する規程」）として承認され、学部全体として委員会が設置されることになった。

## 6. 広報

### (1) シンポジウムの開催（第14回発達科学シンポジウム）

平成18年2月18日（土）、神戸市勤労会館大ホールにて、一般市民及び本学科学生を含め計200名ほどの参加のもと、シンポジウム「人間の発達と人間の行動を考える・人間行動学科発 健康づくり・身体づくり・生きがいづくり・ づくり・」を開催した。本シンポジウムは、人間行動学科のキックオフイベントの一つとして、幅広く市民に向けた人間行動学科からの情報発信を目的として行った。

シンポジウムは基調講演とパネル・ディスカッションから構成された。基調講演は、中川志郎氏（財：日本博物館協会会長）に「動物の一生からみた人間の発達を考える」というテーマをお願いした。続いてのパネル・ディスカッションは、本学科の助教授5名が健康発達、身体行動、行動発達分野から、個々の研究を生かした人間行動の指針を提案した。

参加者からは「大学はもっと市民の中に入って、実践的課題に取り組んでほしい。」という叱咤激励の意見も出された。今回のシンポジウムを通して、大学での教育・研究は、アカデミズムと実社会とのバランスの中で構築されるものであることを改めて認識させられた。

### (2) オープン・キャンパス

8月2日（火）、9日（火）午後1時～5時の2回、平成17年度高校生への大学説明会（オープン・キャンパス）を開催した。内容は、学部・学科の説明、各コースの説明、カリキュラムの説明、入試の説明、全体及び個人的質疑応答で構成した。両日とも150名前後の参加者で盛況であった。また、参加者から多くの有意義な質問を得ることができた。

### (3) AO入試パンフレットの作成

昨年度に引き続き今年度もAO入試パンフレットを作成し、京阪神地区の高校、予備校及び身体行動論コース在学生の出身校を中心に配布した。また、各教員が発達科学部に合格者を輩出している京阪神地区の高校を中心に訪問し、AO入試の紹介を行った。

## 7. その他

### (1) 研究室の移転

行動発達論コースの教員2名の研究室及び院生指導室がE棟に移動した。また、同棟に新たに社会調査士演習室等が配置された。これにより、行動発達論コースの人文・社会科学系教員の教育・研究施設が同じ建物内に集まり、今後の教育・研究の進展に大きく寄与するものと思われる。行動発達論コースは新たに設置されたコースでまだ学生指導室がない。新学科の他学科レベルの学生指導環境づくりのためにも、早急な学生指導室の配分が望まれる。

### (2) 人事

本年度，1名の教員が助教授から教授へ昇任した。また，現在3名の教員の大学院総合人間科学研究科前期課程担当人事も予定どおり承認された。

### (3) 大学院改組問題と新学科

今年度，大学院総合人間科学研究科の改組が具体的に浮上してきた。その中で，新学科の健康発達論コースの教員が，大学院では人間形成学専攻に所属するという形で改組が進んでいる。他の学科は，学科と研究科前期課程の専攻の教員組織が直結しているが，本学科だけは異なるということになる。発足して1年も経ないのにこのような変則的な組織体制になり極めて残念である。この大学院改組が実現すれば，本学科の円滑な運営に大きな支障となることは明白である。人間行動を学ぶために入学してきた学生を欺く結果となるであろう。この問題は，基本的には本学科の問題ではなく学部の問題である。しかし，一番実害を被るのは本学科である。どのような形であれ，新学科がまとまって行動できる体制に問題を解決してほしいものである。

(人間行動学科長 平川和文)

## 2.6. 人間表現学科

### 1. 運営

本年度からの学科改組に伴い，新しく本学科が発足した。運営については学科運営会議を構成し，基本的に毎月1回の定例会議を開催して，学科運営に関するさまざまな問題について対応してきた。運営会議の組織形態は，学科長及び各コース主任3名の計4名で，15回の運営会議を開催した。会議への出席率は100%である。初年度ということもあり，運営会議とは別に教員全員による話し合いも必要となり，3回の人間表現学科検討会議，12回の学科会議を開催し，問題の検討を行った。出席率は90%を超えている。

他に学科独自の委員として，人間・行動表現学科(2年次生以上)講座主任2名，会計，教務，ホームページ，広報担当各2名，入試担当・実技試験各1名の3名，及び新入生相談教員1名を置き，それぞれの任務を遂行した。

年度途中から2名の教員が産休・育休に入り，教育に関しては非常勤講師で補うことができたが，総勢で16名という小規模組織の学科のため，入試実務などに当たっても同様の措置が望まれる。

### 2. 予算

本学科では，各教員研究費から一律に拠出されたものを学科共通予算とした。今年度の用途は，学科共通パンフレット作成費(デザイン及び印刷)と複写費である。複写費の内訳は，複写機リース基本料及び複写枚数に応じた費用で，教員各自が負担することになる用紙購入費は含まれていない。

### 3. 人事

昇任人事2件を人事委員会に提起し，教授会で承認された。

### 4. 入試

学科として初めての前期及び後期日程入試，社会人特別選抜試験を行った。

#### (1) 前期日程実技検査

新学科として試験方法を変えた初めての実技検査であり，受験生の動向が心配であったが，音楽受験は人間行動・表現学科時とほとんど変わらず，美術受験は多少の減少が見られた。

## 音楽受験

志願者数 52 名，受験者数 51 名，合格者・入学者ともに 12 名。内訳は鍵盤楽器（電子鍵盤楽器を含む）で受験する者が 8 割近くを占めたが，これは例年と同様の傾向である。ただし，昨年までは 8 割程度を占めていた後期日程を併願するものは半減し，前期日程に絞っての受験生が多くなった。併願していない受験生の後期日程の志望大学及び学部は多岐にわたっている。

## 美術受験

志願者・受験者ともに 26 名，合格者・入学者ともに 13 名。後期日程併願者は約半数，併願しない受験生は多様な領域に興味を示しているようであり，音楽受験の同様な傾向からも，多様な人材を求める当学科の意図が受験生にアピールできたのではないと思われる。

## 身体表現受験

志願者・受験者ともに 11 名，合格者・入学者ともに 4 名。初めての身体表現受験実技検査を行ったのであるが，モダンダンス，バレエ，ストリート系ダンス，舞楽，日本舞踊，演劇など多様なパフォーマンスを見ることができた。

### (1) 後期日程入試

志願者 82 名，受験者 57 名，合格者 11 名，入学者は 10 名。初めて実技試験を課さない後期日程試験を行った。入試方法の大幅な変更による入学者のキャラクターに大いなる期待が寄せられる。

### (2) 社会人特別選抜試験

志願者・受験者ともに 6 名，合格者・入学者ともに 2 名。新学科となっても大きな変化は見られず，例年と同様の傾向であった。

## 5．教育

### (1) 1 年次生への指導体制

新年度開始時に教員全員参加によりオリエンテーションを行った。内容は，学科紹介，教員紹介も含めたコース紹介及び履修について等である。5 月には当学科を志望した理由，学科の情報入手方法などを含むアンケート調査を行った。新入生からも大きな期待を寄せられていることを厳粛に受け止めなければならない。6 月初旬には新入生相談教員を中心に，新入生（人間表現学科 1 期生）を囲む懇親会を神戸大学瀧川記念会館にて開催し，ほぼ全員の学科教員と新入生及び学科教員に所属のゼミ生（人間行動・表現学科生）有志が参加し交流を図った。

### (2) 履修コース分けについて

平成 18 年 1 月下旬に 1 期生に対して，コース分け説明会，希望調査調べ，希望調査表によるコースの調整などを経て，2 月下旬に発表した。内訳は表現文化論コース 11 名，表現創造論コース 18 名，臨床・感性表現論コース 12 名である。

### (3) 卒業研究発表会他

当学科にはまだ卒業年次生はいないため，本年は特に何も行ってない。

### (4) 学科共通科目について

学科開講の 1 年次の学科共通科目は，共通基礎必修科目として各コースの概論 3 科目，選択必修科目として 3 科目が開講されているが，全体を通して出席率のよい授業が展開された。

## 6．広報

8月2日(火)及び9日(火)午後1時～5時の2回、平成17年度高校生への説明会(オープンキャンパス)を行った。内容は、新しい表現学科の理念を中心とした学科紹介、行動・表現学科とは根本的に異なる3つの履修コースの理念や特徴の紹介、教員紹介などを行った。その後、施設設備見学、参加者と学生との懇談なども行われた。初回は140名、2回目は170名といった多数の高校生及び保護者が参加し、時間をオーバーするほどの活発な質疑・応答が行われるなど大きな関心を寄せられる意義深い説明会であった。

本年度の特色としては、学科案内リーフレット(A4カラー折込6P)を作成し、オープンキャンパス参加者に配布した。なお、この学科案内リーフレットは関西圏内の高校(本学科在学生の卒業校、教育実習校など)にも配布し、また各教員の専門性に係るコンサートホール、美術館、ギャラリー、その他の文化施設等にも配布している。この学科案内リーフレットは、次年度より学部案内パンフレットとともに各機関への送付等も予定しており、広く情宣活動に生かすことになると考えられる。

学科発足に先駆けて開設されたホームページ(HP)のコンテンツは、学科紹介、教員一覧、教育内容、入試情報、学科に対するQ&Aなどであるが、特に初年度の入試の後、実技検査科目の情報を中心に項目を追加し情報発信した。これまで受験生から寄せられた入試に関する事項を中心とした多くの質問に対して個々に回答してきているが、必要と思われる事項に関してはHPのQ&A欄に掲載した。また、オープンキャンパスの際寄せられた質問についても、受験生の公平性を保つために必要と判断されたものに関しては掲載することとした。HPは、学科の情報発信の場として今後さらに重要になると思われ、次年度以降、学科行事などの情報を発信していく予定である。しかし一方で、その運営や外部からの対応には多くの時間と労力が必要であり、体制の整備を急ぎたいところである。

(人間表現学科長 齊田好男)